

桜蔭俳話会 七月句会(第二七八回) 於桜蔭会館

平成二十一年七月二十六日

- 5点①日蝕の余韻のやまず夕端居 文枝
- 2点①駄菓子屋に吊りもの多し古簾 貞勝
- 汗染みの喪のネクタイを外しけり 守
- 2点 登橋礼総帆はらむ南風 溪水
- 七夕竹アラビア文字の願ひごと 与史
- 鎮魂の山の稜線夕焼雲 守
- からまりて行く先がす凌簷花 文枝
- 青春の昭和も遠く夏の海 溪水
- ざるそばの強き腰なり登山口 貞勝
- 少子化や大闊歩する夏の朝 与史
- にはたづみ雲の涼しく駆けぬけり 秀一
- 1点①幾度か屋根打つ雨や明け易き 幸枝
- 連帯の絆くづれし雲の峰 守
- 風鈴の青き風呼ぶ山の駅 貞勝
- 鷺草のはかなくていつとび立つか 文枝
- 夏うぐひす子を呼ぶ声か夕しきり 幸枝
- 1点 鶴篝の闇に漂ふ夢の中 ヤエ子
- 噴水の千手を空へ拵げけり 貞勝
- 犬走り猫犬の字や蝉しぐれ 幸
- ひとの死は突然に来る半夏生 秀一
- オートバイの真夜をけちらし熱帯夜 貞勝
- 赤とんぼふり返りても赤蜻蛉 幸
- 一輪にシャッター繋ぎ蓮見会 与史
- 独り居や葱たつぶりの冷奴 秀一
- 日蝕の悲喜こもごもに梅雨の空 与史
- 夏の湖悠悠すすむ手こぎ舟 ヤエ子
- ※ 医院替へ薬かはらず朝曇 秀一
- 日輪のダイヤリングと化す文月 幸枝
- 芋麻の帯しなやかに八頭身 幸
- 生きるための薬が死因月見草 守

- 梅干の届いて故郷薄香り 文枝
- 雨後の庭若荷四つ見つけたり ヤエ子
- 梅雨明けや網戸抜けくる風の色 溪水
- 海の日や帆船人を掻き集め 幸枝
- 葎障子ひとりをんなの住みにけり ヤエ子
- 夏空や風を吐きつつ帆を畳む 幸枝
- 出番なき浴衣簞笥の肥となり 溪水
- 所在なく手足掻きあゝる梅雨の明 秀一

不在投句・野上貞勝

訂正 六月句会報のうちへ久し振り母と娘と五月闇の作者名

正文枝

誤 幸枝